

四季の訪問

(123)

パーカッショニスト
NPO芸術文化ワークス
代表理事

加藤 訓子 氏

(時習40回)



Photo by Michiyuki Ohba

略歴

1988年 愛知県立時習館高校卒業
1995年 桐朋学園大学音楽学部打楽器研究科修了
世界的なマリンバ奏者である安倍圭子氏に師事
1996年 オランダ ロッテルダム音楽院へ留学
1996年 ドイツ ゲルムシュタット国際現代音楽祭にてクラニヒシュティン賞受賞
1997年 打楽器奏者として史上初のクムラウド称号の授与、ロッテルダム音楽院 首席で卒業
2002年 豊橋文化奨励賞受賞
2012年 サントリー芸術財団 第12回佐治敬三賞受賞
2013年 アルバム『CANTUS』が、第26回MPCJ（ミュージックベンクラブジャパン）音楽賞最優秀録音賞を受賞
2018年 アルバム『BACH』が、第10回CDショップ大賞受賞（クラシック部門）
2018年 豊橋文化表彰（文化振興特別賞）受賞
2019年 第73回文化庁芸術祭音楽部門優秀賞受賞
2019年 豊橋特別ふるさと大使就任

冬の晴れた日曜日、世界を舞台に活躍するパーカッショニスト加藤さんに会いに行きました。日本の拠点である横浜のアトリエには打楽器のマリンバがあり、快く即興演奏してくださいました。その神秘的な音色に編集部一同拍手喝采からインタビューは始まりました。

* * * *

▼音楽、マリンバとの出会い

生まれは浜松です。父の仕事の関係で豊橋に引っ越して、栄小学校、南部中学校、時習館高校と過ごしました。

音楽との関わりは、2歳か3歳の頃に、姉を真似てピアノを習ったのがきっかけです。引っ込み思案で前に出るタイプではなかったのですが、頑張って中日新聞社主催のコンクールで優勝するまでになりました。

しかし、私は手が小さかったので、演奏できる曲が限られてピアノが嫌になることもありました。ただ、両親は習い事に関しては厳しく、やめさせてはくれませんでしたので、続けていくうちに通っていたヤマハの教室で、他の楽器に触れたり、作曲したりして、音楽の幅が広がるようになりました。そこでパーカッションやマリンバという楽器に出会い、「あ、これだな」と。これなら私の小さな手のハンディも克服できるし、ピアノでは味わえない楽しさ、リズムを叩いて感じる高揚感、音楽の根源的な楽しさ。「これならいける」と確信し、両親に「この楽器を私はやる」と告げ、4オクターブのマリンバを買ってもらいました。

それが中学生くらいです。両親は「私がやりたい」というものはいつも応援をしてくれました。

▼音楽中心の高校時代

時習館高校に通いながらもマリンバのレッスンは続けていました。マリンバの先生は、静岡県の磐田市在住で、桐朋学園大学で教えている世界的なマリンバ奏者の安倍圭子氏の直属のお弟子さんでした。その先生から「音大に行かないか」とお声をかけていた

ただき、自然と桐朋学園大学へのルートが出来上がっていきました。レッスンのために東京へ通うなどして忙しく過ごしました。学校生活はというと、女の子ばかりのバンドを結成して、ドラム担当。コピー曲やオリジナル曲の創作、演奏、特に時習ソングを創作して、時習祭やイベントでの演奏はとても思い出深いです。

勉強の方は、音大進学が頭にあったので、さほど熱心ではありませんでした（笑）。そのため、テストの点数が悪くて、当時担任だった英語の和田先生が気にかけてくださって（笑）。その和田先生が企画、実施された夏休みのアメリカへのホームステイも高校時代の良き思い出です。若く柔軟な時期に海外の経験ができたことはとても刺激的でした。

▼音楽の桐朋学園大学へ

進学は桐朋学園大学音楽学部打楽器科です。打楽器科は1学年5名の少人数で、桐朋学園は他の専攻の学生とも深く交流ができるのでさらに音楽の幅を広げられました。学生は「個」で自身の音楽の世界を追求するタイプが多かったのですが、私の性格にとても合っていたと思います。

また、打楽器科はとても忙しく、朝の5時から学校で個人練習をする日々でした。一方で、大学生活は初めての一人暮らし。



Photo by Michiyuki Ohba

両親が電化製品を豊橋で購入してくれて車で運搬してくれて。両親が帰るときには、ボロボロと涙がこぼれたのを覚えています。4年で打楽器科を卒業しましたが、ネットワークや情報収集、学校環境の利用といった面から桐朋学園大学の研究科に在学することになりました。そして、在学中からプロとして外部での演奏活動を開始するようになりました。

▼さらにその先、オランダ留学へ

自分の可能性を広げるための初の海外進出はドイツでした。当時は現在のようにインターネットやメール環境は十分ではなく、熱意と根気でなんとか現地を教えている日本人の先生にコンタクトすることができ、日本とドイツを行き来するようになりました。そんな中で、オランダのロッテルダム音楽院で教えている米国人の先生と出会うことができたのです。ここでも桐朋学園進学を勧められた時と同様に「こちらで勉強

してみないか」とお声をかけていただき、奨学金生としての待遇で勉強し、好成績で卒業することができました。

▼拠点をヨーロッパからアメリカへ

2000年までは、日本とヨーロッパを行き来していましたが、2000年にアメリカのナッシュビルで打楽器のコンベンションがあり、アーティストとして参加しました。そこで、夫と出会い、拠点をヨーロッパからアメリカへ移しました。今は、日本とアメリカを行き来して演奏活動をしています。演奏活動は企画から実施運営まで、ひとりでするものではありません。夫婦での共同活動で、企画は私がやりますが、制作や運営は夫が担当です。また、夫は私の体力管理の面でも指導してくれ(笑)、演奏は体が資本でもあるので指導されながら体を鍛えています(笑)。

▼自然に歩いた音楽の道、マリンバの道

もともと音大に行くとか、音楽を仕事にするとか想像もしていなかったのですが、ただ続けてきて、その結果として自然に今がある感じです。楽器と向かい合っていて、「弾けるようになりたい」、「うまく弾けるようになりたい」の一心で、目の前のことをひとつひとつクリアしていくことで次の機会につながり、新しい人と出会い、それが舞台での表現であったり。そうやってきて今に繋がっています。

振り返ると、小さい頃にピアノを始めて、手の小ささでピアノに悩んでいた頃にマリンバと出会い、静岡の先生から世界的なマリンバ奏者の安倍圭子氏まで繋がって、さらに世界の作曲家との繋がりができ、今があります。ピアノほど演奏人口が多くないマリンバです

が、小さい頃にずっとやってきたピアノの経験が、他の演奏者とのハーモニーを作ったり、曲の構成を作ったり、音色を突き詰めていくという点でとても役立っています。すべてが繋がっていると感じています。また、ピアノで普通にできることがマリンバだとかなかなかできないというか。ピアノで表現していたことをマリンバでできるかというチャレンジが今はおもしろいと思っています。

▼アーティストとしてのこれから

演奏は体と運動して出ていくものが一番自然です。どれだけ体を使えるかで音量や表現の幅が変わります。このように気づいたのは30代の後半で、体や呼吸のリンクがおもしろく、演奏者としての本来の円熟期はこれからだと思います。具体的には、いろいろな人や曲との出会いの中で自然に次にやるべきことが生まれます。例えば、その時々で、スチールドラムにはまってみたい、マリンバにどっぷり浸かってみたい。2009年からアルバムを出していて、今6作目ですが、アルバムと自分のやるべきものが目の前に現れた時に、それをひとつずつ形にしていき、続けていけたらと思います。とても大変なことなのですが、ただ、私が取り組んでいるテーマが世界的にはとてもレアなレパートリーのもので、私自身リタイヤした後や死んだ後でも作品が残っ

ていけば、これほどうれしいことはないと思っています。

▼アルバムに込めたそれぞれの思い

他の楽器のための楽曲を演奏する場合、マリンバ向けに編曲し、自分で楽譜を直して演奏します。

過去、ステイヴ・ライヒの楽曲を演奏したアルバム『クニコ・プレイズ・ライヒ』、アルボ・ペルトの『カントゥス』は、ひとりで10パート以上をオーバードビングして、全員のアンサンブルも演って、そこでさらにライブで加わるという特別な手法を用いているので、特殊な色合いを持ったものでした。

それとは対照的に、バッハの楽曲を演奏したアルバム『J・S・バッハ マリンバのための無伴奏作品集』では、以前エストニアの教会で演奏した際の音色がとても素晴らしかったので、そこで何かを残したいという思いもあり、マリンバの王道的な音色として録音場所を選びました。バッハのアルバムは、チェリストやヴァイオリニストが一生に一度は2枚組のアルバムを制作したいと思うように、そのチェロとヴァイオリンそれぞれの楽曲の半分を収録したものです。まだ半分残っていますが、いずれ完成したいと思っています。

▼次世代、若い演奏家のために

桐朋学園大学で3年間ほど教鞭をとった

ことがあります。日本ではプロを目指しなくても表現する場が少ないのが現状です。早い時期にアーティストとして、小さくてもよいので、ひとつでも多く演奏できる場が必要です。私自身のアーティスト活動と並行して、若い演奏家を支援するアーティストインキュベーション事業を興し、『NPO芸術文化ワークス』の代表をしており、若い演奏家が活躍する場所をもっとつくっていかれたらと思います。

* * *

インタビュー中「目の前にあるものを」「ひとつずつ」という言葉を何度も繰り返されていた加藤さんはとてもたおやかで静かな雰囲気をお持ちの方でした。しかし、一旦、マリンバの前に立ち、マレットを持って演奏に入る瞬間、その小さな体に何かが降りてきたように楽曲の中に入り込んでいく様子は世界で活躍する本物の表現者の姿でした。

加藤さんの次の新アルバムは、桐朋学園大学前学長 三善晃作品集『トリビュートトゥミヨシ』2020年秋グローバルリリース(9月中)予定です。ご期待ください。また、現在発売中の加藤さんのアルバムもあります。この機会にぜひ加藤さんのマリンバの世界をお楽しみください。

(小久保 真夕子)

好評発売中

○ステイヴ・ライヒ
ドラミング



○J・S・バッハ マリンバ
のための無伴奏作品集



○カントゥス〜ペルト、
ライヒ、ハイウェル、
デイヴィス



○クニコ・プレイズ・
ライヒ



○IX〜クセナキス プ
レイアデス/ルボン

